津田昇平教話　第十一話

令和三年一月十一日　朝の教話

させていただくという心には、神様は
つきまとうてくださる。

おはようございます。令和三年一月十一日をお迎えさせて頂きました。朝もまた、目を覚ませて頂き、服に着替えて、そしてお参りをさせて頂いて、神様にご挨拶(あいさつ)を申し上げることができるというのは、やはりありがたいことやなぁと、改めて思わせて頂きます。

「する」ということと、「させて頂く」ということの違いを、よく話をすることがありますね。よく、「金光教の先生っていうか、金光教の信者さんとか、金光教の信仰される方は、『させて頂く』という言葉が多いですね」っていうことをこう、聞いたことがあるんですよね。

直接私も言って頂いて、まあそうやって言って頂いて、ああ、そう言

われればな、という気はいたしました。

で、「する」ということと、「させて頂く」ということは、どう違うのかっていうことになってくるわけですね。

二代金光様が、

「氏子（うじこ）、信心すると思うな。すると思うたらおかげはないぞ。信心させてもらうという心になればおかげがある」

【二代金光様　二七〇より抜粋】

と仰る。また、お商売をされる方に対して、

「氏子、商売すると思うな。商売すると思うたら、神は見ててやる。商売させていただくという心になれば、神がつきまとうてやる」

【同】

と仰って、さらには、

「氏子、取次(とりつぎ)をすると思うな。自分の力で取次すると思うなら、神は見ててやる。取次させてもらうという心になれば、神がつきまとうてやる」

と仰せられた。

【同】

と、こう仰ってますね。

「する」ということ、「させて頂く」。信心すると思ったらいかんよ、と。信心させてもらう。させて頂く、ということ。「氏子(うじこ)、商売すると思うな」すると言ったらもう、見ててやるだけやと仰るんですよね。で、商

売するのではなく、「商売させていただくという心になれば、神がつきまとうてやる」って。お取次(とりつぎ)でも、「取次をすると思うな」。ここ大事なんですけど、「自分の力で取次すると思うなら、神は見ててやる」。

これ、商売するっていうと、教えの中やったら、「商売すると思うたら、神は見ててやる」なんですけど、取次するってなってきたら、「自分の力で取次すると思うなら」ってあるんですよね。信心するっていうこと。まあ商売するっていうのでも、一緒のことやと思います。自分の力で信心すると思うたらおかげはない。自分の力で商売すると思うたら、神は見ててやる。取次させてもらう、させて頂く。商売させてもらう、させて頂く。信心させてもらう、信心させて頂く。という心になればおかげが

ある。こう仰るんですね。

違うみ教えでは、

お供え物でも何でも、自分がするのではない。みな、

全部ってことですね。みな、何もかも。

させていただくのである。させていただくという心には、

神様はつきまとうてくださる。

【二代金光様　三〇九】

と、こう仰る。

これまあ、おんなじことですね。お供え物をするということにしても、「これ、お供えします」っていうんじゃないですよね。これ、よく私お話するんちゃいますかね。

例えば、氏子（うじこ）が神様にお供えするんでもそうやし、お祭りでもそうですね。お祭りでお供え物を用意して、お供えするとか。祭詞奏上（さいしそうじょう）にしても、お手紙を書いて、まあ、あれはラブレターやって言うてますけど、ラブレターで、神様にお供えをさせて頂くということ。これも、おんなじ

ことなんですよね。

自分がするんじゃないです。お供え物言いましたかて、じゃあお供え物ってなんやろ?って。お金をお供えするんでもですよ、これ、自分が働いたって考えてるのが、まあそもそも間違いなんですけど。

お天道(てんとう)様がお照らし下さり、太陽があり、ねぇ。そして、雨が降り、この天地の中で命を育んで下さり。植物も、動物も、育んで下さり、そして、そのお恵みを、私たちは頂いて、その中で命をお守り下さって、そして過ごさして頂く。命を育んで頂いてね。

で、頭も、体も、心も、心臓も、何もかも神様がお守り下さって、お働き下さって、そして生かして頂いてるわけですよね。そして生きてるこ

とができる。そん中で、お仕事もさして頂く。仕事をすると言いましても、まあ今も、さっき言いました、目が覚める、目を覚まして頂くこともそうなんです。自分の力じゃない。起きて、着替えて、食事を頂いて、自転車に乗って、駅まで行って、電車に乗って、で、また歩いて会社に着いて、とかね。で、一日仕事をして。終わって帰ってきてって、やってるわけですけど。でもこれ、ずーっと、その間、頭が働いて下さってますしね。目も見えるし、耳も聞こえるし、手足も動くし、それで初めて仕事として成り立つわけです。

これ、自分の力でしてるというふうなことは、もうほんとに思い上がりで、自分一人では何もできないんですよね。「させて頂く」というのは、

神様のお力で、ということなんですね。

「氏子、取次(とりつぎ)をすると思うな。自分の力で取次すると思うたら」ってなってますね。自分の力で。じゃ、自分の力ではないぞ、ってことを仰ってるわけで。じゃ、自分の力でないなら誰の力やねん。俺(おれ)の力じゃないんやったら誰の力やねん。それが、神様のお力で、神様のおかげで、ということになるんですね。

これ、お供え物でも、自分が稼(かせ)いだなんていうのは、もうそんなね、傲慢(ごうまん)な言い方はないんですよ。じゃあ、育てる、育てるって言いましてもね、例えば、まあ言うたら、植物を、お花を育てて「これ、私が育てたんです」って、まあ言いますわ、簡単にはね。せやけどそれ、紐解(ひもと)いてみ

て考えてみたらですよ、太陽を作れましたか?無理ですよ。じゃあこれ、地球というのを作れましたか?これ無理ですよ。光っていうものを存在させて、それをこう、注ぐ力が人間にあったんですか?ないですよ。水を作ることがそもそもできましたか?できないですよ。じゃあ、養分が必要って、養分一個一個、人間が生み出したんですか?あなたが生み出したんですか?違いますよ。

じゃあ一つのチューリップやったら、チューリップの球根というもの、一つの種をですね、人間が、私という人間がこれ、この世に存在せしめたんですか?生み出したんですか?違いますよ、これもね。で、それを、命としての働きをそこに宿らして育てていった、なんてことはないわけ

ですね。一個一個、細胞を作って、それもできないですよね。

そう考えたら、どんなものも、自分の力でしてるということはほんとになくってですね、まあせいぜい神様のお力を頂いて、人間がやってるなんてことは、うーん…ま、お水あげるぐらいですよ、お花育てようと思ったら。ちょっと肥料あげたり。ま、鉢(はち)があるんやったら、ちょっと日差しが強いかな、ちょっとこっちに移動させようかな、とかね。雨がちょっと多いから、避(よ)けようかな、とか。うーん、お水少ないんかなぁ…もうちょっと入れようかな、とかね。ま、せいぜいそれぐらいでしょう。

別に水を作ったわけでもないし、命をこう、私の力でこれを育てたなんて、「一センチ伸ばした」とかね、「細胞一個一個作ったんや」なんて、

そんな偉そうなことは言えませんよ。せいぜい、お水どうかな、日当たりどうなんかな、まあそれぐらいです。それすらね、頭やら、目やら、手やら、色々使うわけで、これも自分の力でやってるわけでもなんでもないですね。そう思ったらどんなことも、「している」なんていうようなことは、ほんとは言えないんですよね。

四代金光様は、「人間はすぐに、する、すると言う」ってことを仰って、で、「するっていうのは、できるからするのである」ってことを仰るんですね。「お風呂に入る」と言う、と。で、入ると言うのんは、「お風呂に入る」と言うけど、「入ることができる」っていうことなんです。それを「す

る」ということだ。じゃ、「『できる』と言うのは、なんで『できる』のか、というとこを考えてごらんなさい」ということを仰るんですね。

これ、おんなじことですよね。これ、できるということが不思議なんだ。自分の力でできてるんじゃないんだ。神様のお力があって、命が働くことができる。

昨日も申し上げましたけど、

十本の指も、神様がさわってくださるから動くのである。

【二代金光様　一〇三より抜粋】

十本の指でも動くのも、神様が、その上から手を添えているから、十本の指が動くのであるっていう教えがございますね。おんなじことですね。

商売するんでもそう。信心するんでもそう。取次（とりつぎ）するんでもそう。なんでも自分の力で「する」というのではない。じゃあ、「させて頂く」ってどういうことやって言ったら、神様のおかげを頂いて、神様にお恵み頂いて、神様のお世話になって、神様にお許しを頂いて、神様の庇護（ひご）のもとで、する。これを、「させて頂く」というんです。

もう一度言いますよ。神様のおかげを頂いて、神様にお恵み頂いて、神様のお世話になって、神様にお許しを頂いて、神様の庇護のもとで、

することを、「させて頂く」というんですね。

で、この「させて頂く」という心、もう今言うたように、ほんとに、

おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいく

【理Ⅱ　利守志野（としもりしの）一より抜粋】

って教えがあります。

ほんとに、おかげの中で生きているということは、おかげに貫（つらぬ）かれてるんですよ、人間の命というのは。貫かれてるっていうのはこう、一つ

の命というよりも、一つの命というのは、一個一個の細胞が一つの生命やと思ったらですよ、何十兆もの、まあ、五十兆、六十兆とか、そういう数の命で、一つの命がまた成り立っとるわけですね。そう思うと、神様の、ほんとに大きな大きなお働きを頂いて、そうして、することができてるんです。で、そこをよくわきまえて、これが道理なんですもんね。実際そうなんですよ。その道理をよく分かって、おかげ頂いて、お世話になって、お許し頂いて、さして頂いてる。それを当たり前と思わずに、「有り難うございます」という心でするということが、「させて頂く」ということなんでしょうね。

これ、教祖様だったらどう仰ってるかっていうと、

神様を信ずる者は、何をするにしても遊ばせていただくのである。

【理Ⅱ　近藤藤守（こんどうふじもり）　二二より抜粋】

今度、「遊ばせて」って仰るんですよ。「させていただくのである」って仰ってるんですよ。何をするのでも「させていただくのである」じゃなくて、「遊ばせていただくのである」って、こう仰る。「遊ぶ」ってことまで入れて下さるんですよね。四神（しじん）様（二代金光様）のみ教えは「させていただく」ということやった。で、教祖様は、「遊ばせていただくのである」

って仰る。

広前の奉仕(ほうし)で遊ばせていただき、商売でも農業でも遊ばせていただいているのである。みな（※人間みんな）天地の間に、うれしく、ありがたく遊ばせていただいているのである。

【同】

って仰るんです。

これ、二代様のご理解であったり、四代様のご理解であったりいうこ

との、まあ、繋(つな)がってくるとは思うんです。で、もっと言うたら、元々の根本になってくるでしょうねえ。で、ただ「する」「させていただく」ということやなくって、教祖様の教えっていうのは、もう一歩こう踏み込んで仰ってるようにも思いますよね。

教祖様が仰ってることと、金光様、歴代の金光様が仰ってることは違うということを言ってるんじゃなくって、「遊ぶ」ということ。遊ぶってどういうことですかね。普通に考えて、好きなこととは言いませんけど、まあでも、楽しましてもらってるっていうことでしょうね。「遊んでたらどんな気分ですか?」言うて、子どもに聞いたら「楽しい」って言うでしょうね、やっぱりね。それしかないですもんね。犬猫でも、遊んでたら楽

しそうですしね。まあ大人でも、なんか遊んでたら楽しいでしょうね。

みな天地の間にうれしく、ありがたく、遊ばせていただいている。で、また「嬉(うれ)しく楽しく有(あ)り難(がた)く」※っていうふうにして、御道(おみち)ではよく言われていますね。

こう考えると、信心させて頂く者っていうのんは、本当に道理(どうり)をよく見なさい、と。この天地の道理、自分という人間の成り立ちをよう見てごらん。当たり前やと、誤解してないか?これ、当たり前やと、勘違(かんちが)いしてないか?普通に自分が動いてるのは当たり前、と騙(だま)されてへんか?ちょっとよう見いや。ちょっと目ぇ覚ましいや。天地、そないなってるか?ちゃうやろ?目ぇ覚ましいや。ほんまのこと見いや。どこ見てんの?ち

ゃあんと見んといかんで。天地のこと、あなたのこと。

あなたは、神様のおかげを頂いて、神様にお恵み頂いて、神様のお世話になって、神様にお許しを頂いて、神様の膝(ひざ)の上で、庇(ひご)護のもとで、生かされて、そして生きている。そしてそれは、ぜーんぶ、神様のあなたへの、愛情、深いご慈愛(じあい)、神様、あなたのことがかわいいかわいい言うて、かわいいという心、それが神様で、それがそのまんま神様なんですね。で、その中で、人間は生きることができる。その生きるという言葉の中身で言うたら、何をするんでも、遊ばせて頂くということ、それが、生きるということだ、と。天地の間で、天と地の間で、うれしく、ありがたく、遊ばせて頂いているんやで。って。それを、天地の間で生きるという

ことなんや、と。

広前の奉仕(ほうし)で遊ばせて頂く。商売で遊ばせて頂く。農業で遊ばせて頂く。お供えをするんでも遊ばせて頂く。何もかも、自分の力ではないやろ。神様のおかげ、神様のご慈愛の中で、かわいがってもろうて、そして、してるんや、と。それを、うれしく、ありがたく、遊ばせて頂かんといかんのやないか、と諭(さと)しておられるんです。目を開きなさい、と。目を覚ましいや、と。本当のことよう見いや、言うて。薄っぺらい事柄だけ見て、騙(だま)されとったらいかんで。寝ぼけとったらいかんで。ちゃあんと肉眼をおいて、心眼(しんがん)を開いてみ?よう見てみ?心眼を開くために肉眼はあるんであって、そのためによう見てみ?

ほら、天地のお恵みは、あなたにおかげを授けて下さってる。ご慈愛いっぱいや。その中でお恵み頂いて、何から何まで、必要な物ぜーんぶご用意して下さって、お世話になって、お許し頂いて、神様の懐（ふところ）の中で、膝の上で、庇護のもとで、さしてもらってる。これを「する」なんて偉そうに、人間は言うもんじゃないよ。あくまでさせて頂いてるだけなんだよってことですね。それを、ようよう理解してくれよ、と。よう分かっといてや。分かっとかんと、あかんねんで、人間は。ということですね。ま、「それを分かってくれよ」ってまあ、わざわざ願って下さってるんでしょうね。

子がいたら、「これ当たり前ちゃうんやで。これ、有（あ）り難（がた）いんやで。よ

う分からんといかんで」って言うけど、子どもは「ふぅん」って聞きながら、「はいはい」とか言って、どんだけ分かってるやら分かりませんけど、でもやっぱり、「有り難いんやで」って、教えんとあきませんもんね。

教えてく中で、「そうか。そういうもんか」と思うたり、ある時、「ほんまやなぁ。有り難いなぁ」と思うたり。でも、できたら特別なことがあるからじゃなくって、目が覚めることができる、お風呂に入れる、体動かすことができる、そういう普通のこと、当たり前のように思うてること、これが本当はすごいおかげなんだっていうことを、そこをよう見て欲しいなぁ。神様のおかげいっぱい頂いてるんやから、だからお礼大事にしていこうよ、って。不平不足不満ばーっかり並べて、頂いてるおかげの

お礼が足りずにご無礼になって、行き届かんところがそれでもあるのにお赦(ゆる)し下さってるのに、お礼もなくて、お詫(わ)びもなくって、改まりもなくてじゃ、それじゃいくらなんでもあんまりやないか、と。それじゃ、うかうかめぐり積んでるのと一緒やないか。もうそういう生き方やめようや、と。

本当のこと見て生きていこう。本当の、人間としての正しい生き方、人間らしい生き方をしていこうね。もう、してってくれや、頼むわ、と。そこをよう分かって欲しいんですね、神様は。それを、教祖様はよう分かられた。で、「それを、お前は生きて口があんねんから、よう伝えてくれよ」ってことを仰って、その願いを受けて教祖様も、「あーぜひぜひさ

せて下さい」いうことで、さして頂いたんでしょうね。

ま、それを聞かせて頂いてるお互いは、何でも「させて頂く」というふうな心を大事にして、ま、ついついこう、段々慣れて、何でもかんでも、「させて頂く」「させて頂きます」って、まあ言っちゃいますけどね。でも、ようよう、そこで流さずに、ちょっと立ち止まって考える時間は必要ですよね。何でも、「してる」んじゃないんやなぁ。神様のご慈愛の中で、神様の御神徳（ごしんとく）の中で、おかげの中で、お恵みの中で、お世話になって、お許し頂いて、懐の中で、庇護のもとで、「さして頂いている」というところ、そこのことを、よう心に刻んで、その教えを身に体（たい）して、生活をさせて頂きたいなぁと思いますね。

今日もまた、どうぞ信心のお稽古（けいこ）、心のお稽古、ま、意識のお稽古。意識改革って言ったら、すごい俗っぽいかもしれませんけどね。でもそういうことですよね。本当のことをよく見ていこうよ、ということですね。

はい、今日もまた信心のお稽古をさして頂きましょ。よくお参りでした。

（了）

※ 編集者注　二十二ページの「嬉しく楽しく有り難く」は、御道ではよく聞かせて頂きますものの、典籍（金光教教典等）にはないため、最初にそのお言葉を仰った方はどなたなのかについて、金光図書館に問い合わせましたところ、「昭和二十六年

十二月の金光教報 第一四三一号に掲載されていました、松山成三（まつやまなりみつ）先生の文章（遺稿）が、この度調べた限りでは、最初であると思われます」とのご返答を頂きました。

松山成三先生は、親先生（津田昇平先生）の曽祖父様であられまして、中国（当時の満州）にて大連教会を開かれ、多くの氏子を救い助けられ、出社教会も各地に生まれました。終戦、引き揚げ後のご晩年には、岡山中部教会を開かれ、また多くの氏子を救い助けて下さいました、大変高徳な先覚先師の御一人であられます。

親先生にお取次を頂く中で「嬉しく楽しく有り難く」というお言葉をお下げ頂いた方も多くおられるかと存じますが、そのお言葉を最初に仰いました御方が松山先生であられますことに、奇しき御縁を感じずにはおれません。

津田昇平教話　第十一話

令和三年一月十一日　朝の教話

令和四年二月二四日　初版発行
令和四年三月十四日　第二版発行

発行所　金光教尼崎教会
〒六六〇―〇八九二
兵庫県尼崎市東難波町三―七―五